『邪馬台国新聞』…「古田説は成立するのか？」「九州説崩壊？」等を考える

2023.6.5　ID10455　大野文雄（近畿・東海支部）

『邪馬台国新聞』に興味を惹かれる表記の投稿がありました。第16号の児玉真氏の「古田説は成立するのか？」と大平裕氏の「邪馬台国北九州説の崩壊」です。古田説は私の倭人伝挑戦へのきっかけとなった原点であり懐かしく思い出しました。古田説に対する評価は邦光史郎氏の『邪馬台国の旅』（徳間書店　1987）が参考になります。

「古田説はまことに論理的かつ明快であの矛盾の多い『倭人伝』を見事に解釈してみせてくれる。その点、今後、古田説を乗り越えて新説を展開するのは、さらに至難の業となるだろう」と、高く評価をする一方で下記の矛盾点も指摘しています。

Ａ.投馬国の場所が女王国の「南」になっているが、「北」であるべき。

Ｂ.朝鮮半島から対馬、壱岐、唐津へと渡海する距離が全部千余里だが、実際は異なる。

当時、私もＡの疑問を抱き古田説を越えようと「投馬国が邪馬壹国の北」になる道筋の発見を目標とし、それを達成できた（と思う）道筋を全邪馬連発刊予定の『みんなの邪馬台国』に「倭人伝の里程書式（読み方）の定義と解読」と題して投稿しました（以後、私の投稿文）。

以下に「古田説」を中心に表題のテーマについて考察します。

1.古田武彦案は本当に成立するのか？…完全には成立していない

児玉真氏の第16号投稿文です。私は「古田説は完全には成立していない」と考えています。従来、古田説の一角を論理的に崩すことは困難だったのですが、「陳寿が作った里程書式」の観点から突破口を見つけたので、古田説の矛盾点を明らかにしていきます。

古田説について、『「邪馬台国」はなかった』（ミネルヴァ書房　2010）（以後、古田本という）を参照しています。

里程問題は里程記事抜きには語れないので下記しますが、必要な時に見てください。

①従（帯方）郡至倭、循海岸水行、歴韓国、乍南乍東、到其北岸狗邪韓国、七千余里

②始度一海、千余里至対馬国・・所居絶島、方可四百余里・・有千余戸・・乗船南北市糴

③又南渡一海千余里、名曰瀚海、至一大国　方可三百里・・有三千許家・・亦南北市糴

④又渡一海千余里、至末盧国・・有四千余戸・・草木茂盛、行不見前人

⑤東南陸行五百里、到伊都国　有千余戸

⑥東南至奴国百里・・有二萬余戸

⑦東行至不弥国百里・・有千余家

⑧南至投馬国、水行二十日・・可五萬余戸

⑨南至邪馬壹国、女王之所都。水行十日、陸行一月・・可七萬余戸

⑩自女王国以北、其戸数道里可得略載、其余旁国遠絶、不可得詳

　　次有斯馬国…次有奴国　此女王境界所盡…其南有狗奴国…不属女王

⑪自郡至女王国、萬二千余里

古田説の解釈と矛盾点・・・投馬国が邪馬壹国の南になっている

古田説最大の矛盾点は「投馬国が邪馬壹国の南」になっていることです。

里程⑧に対して古田氏は「投馬国は不弥国の南で、不弥国から水行二十日の場所」と解釈し、投馬国を鹿児島の薩摩、邪馬壹国は福岡の博多周辺としたので、投馬国が邪馬壹国の南になっています。

・⑩自女王国以北、其戸数道里可得略載、其余旁国遠絶、不可得詳

「女王国より以北は、其の戸数、道里を略載すること得べけれど、その余の旁国は遠絶にして、詳（つまびらか）にすることを得べからず」。

つまり「戸数や道里を略載した国々は女王国より北」と示しています。古田氏は女王国＝邪馬壹国とし、⑥の「百里」や⑧の「水行二十日」を道里に含めています。

すると、⑧の投馬国は「戸数」と「道里」の記載があるので「投馬国は邪馬壹国より北」となり、「南」とした古田説は⑩と矛盾します。

・古田氏の釈明

この矛盾に対して古田氏は概略以下のように説明しています。

「自女王国以北」を「女王国より北の国々」と解釈するのではなく、

「女王国より北の、行路の国々」と解釈すべきであり、

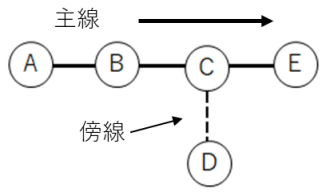
投馬国は5万戸の大国であるから（傍線行路であっても）陳寿は記載したのである。

古田氏は里程①から⑨の中で邪馬壹国へ至る一本の道筋上にある国々を主線行路、⑥の奴国と⑧の投馬国は主線行路から枝分かれした傍線行路という区分をし、「北の行路」とは「主線行路の国々」としているようです。つまり、投馬国が主線行路か傍線行路かが論点となります。

・主線行路と傍線行路

主線行路とは下図のＡＢＣＥであり、傍線行路とはＣを分岐点として主線行路から枝分かれした道筋Ｄのことを言います。

主線行路と傍線行路



左図のように倭人伝は帯方郡から邪馬壹国へＡＢＣＥと連続して行く主線行路が基本の道筋です。この中にＤのような傍線行路をＡＢＣＤＥの順で書く里程記事の中で、どのようにその区別を明快に表現するか、が陳寿の腕の見せ所です。

先ずは、古田氏が主線と傍線とする里程書式を見ておきましょう。

・主線行路の書式「（方向）＋動詞＋至（到）国名」　里程①②③④⑤⑦

例えば⑤「東南陸行五百里、到伊都国」は「行」の動詞が「到国名」の前にあり、主線行路の前述国である④の末盧国から続けて伊都国に移動することを示しています。

これは、順に「至（到）国名」へ行く主線行路として特に問題なく理解できるでしょう。

・傍線行路「方向＋動詞なし＋至国名」：里程⑥⑧⑨

主線と比べると「至国名」の前に「行」の「動詞」がなく、前述国から「至国名」への移動がないことを示しています。

・古田説の里程解釈

古田氏の里程解釈を古田本から下記のように要約して示します。

（ｉ）⑥⑧⑨は「方向＋至国名」で「至国名」の前に動詞がないので、傍線行路となる

（ii）但し、⑨の邪馬壹国は「従郡至倭」の最終目的地なので動詞がある（隠れている）。

（iii）従って、⑥奴国と⑧投馬国が、⑤伊都国と⑦不弥国を分岐点とする傍線行路となる

（iv）結果、⑦不弥国－⑨邪馬壹国が主線行路となる。

（ｖ）⑨の「水行十日、陸行一月」は最終目的地への総日程であることは当然である。

（vi）すると最終の不弥国－邪馬壹国の距離が示されていないので両国は接している。

よく考えられた解釈で古田氏は（ii）で⑨を傍線行路から外しています。

・古田説は傍線行路の定義が混乱している？

古田氏は⑥「東南至奴国百里」と⑧「南至投馬国水行二十日」には「至」の前に先行動詞がないので傍線行路、としています。「先行動詞がない」というのは「前述国から至国名への移動行為はない」と読者が解釈し傍線行路だと理解するからで、私もそのように理解しています。

⑤の「東南至奴国百里」の場合には「百里」の中にも「移動行為がない」ので、伊都国から奴国への移動行為はなく、ここは傍線行路だと明快です。

一方、⑧は「投馬国は不弥国の南にあり、不弥国から水行二十日である」と、前述国である不弥国から投馬国への移動があり、ここが不自然です。

つまり、古田説は⑧の解釈が適切ではなく「投馬国が邪馬壹国の南」になった、と言えるのですが、「水行二十日」は単なる旅程で移動行為ではない、と言われる可能性もあり明快に言い切ることができません。

そこで陳寿に登場いただき、「古田説の⑧の解釈は間違いじゃ」と明快に言ってもらわねばなりません。

・答えは「距離の有無」にあり

主線と傍線行路の違いが「動詞の有無」で判断できたように、「水行二十日」が移動行為を伴うものか、単なる旅程なのかが「距離の有無」でわかるように陳寿は書いています。つまり、⑥⑧⑨で「陳寿が作った里程書式」は**「方向＋至国名＋距離＋旅程」**で、これが一式セットになっている、という「目からうろこ」の驚くべきものです。

従って⑧は「方向＋至国名＋**距離なし**＋旅程」と読む必要があります。

この方式で⑥⑧⑨を個別に読んでみましょう。

⑥「東南　至奴国　百里」:「方向＋動詞なし＋至国名＋距離＋旅程なし」

「東南至奴国」の方向起点は主線行路の前述国である⑤の伊都国です。ここは「至」の前に動詞がなく傍線行路と考え、「奴国は伊都国の東南に在る」と読みます。次の「百里」にも移動行為がないので傍線行路と確定し、単に伊都国からの距離を示しています。ところが、それだけではなかったのです。なんと、「百里の距離がある＝伊都国と接した国ではない」

と示しているのです。

そして、奴国は傍線行路なので⑤の伊都国から枝分かれするので、次の主線行路は伊都国から「動詞」がある⑦の「東行至不弥国百里」となります。

⑧「南　至投馬国　水行二十日」:「方向＋動詞なし＋至国名＋距離なし＋旅程」

「南至投馬国」は「不弥国の南に投馬国が在る」と読み、傍線行路と考えたくなりますが、とんでもない。次に「距離なし」で「不弥国と投馬国は接している」となり、投馬国は不弥国に接し、不弥国に続いた主線行路だったのです。

これは、次に同じ書式の⑨「南至邪馬壹国」があり、不弥国から南へ向かう線上に投馬国・邪馬壹国が連続して記されていることからも明確になります。

そして、次の旅程「水行二十日」には「水行」という長距離の「移動行為」が入っています。ここが肝心ですが「投馬国は不弥国に接している」ので「水行二十日」は不弥国からの移動ではありません。では、この移動の起点はどこなのか？となります。

この里程の中で別の起点となり得る記述は、冒頭①の「従郡至倭」の「郡より」しかなく、「郡より水行二十日」となって帯方郡からとなります。

従って、「不弥国の南に投馬国があり、不弥国と接している。投馬国は帯方郡から水行二十日である」となります。つまり、帯方郡から船で直接、投馬国へ行くルートです。

ここで「水行二十日」を不弥国からとした、古田説の一角が崩れました。陳寿は「里数」と「旅程（日数)」を書式によって厳格に区別していたのです。

・なぜ里数から旅程（日数）に変えたのか？

従来から里程の中で「里数」から「旅程（日数)」への変化が注目されていましたが、ここに至ってその理由が明快になりました。

⑦までの「里数」から⑧⑨で唐突に「旅程（日数)」に変えたことは、「距離の里」を書かないことで、国が接していることを示すためだったのです。古田説には「里数」から「旅程」に突然変わった説明がありません。

また、「里数」から「旅程」への変化は帯方郡に保管された別の里程オリジナルから採録したことを伝えており、陳寿は「水行二十日」の起点が帯方郡であることを読者に気づかせようとした、と見ることができます。

⑨南至、邪馬壹国、女王之所都　水行十日、陸行一月

書式は**「方向＋動詞なし＋至国名＋距離なし＋旅程」**で、⑧と同じです。
投馬国が主線行路なので「投馬国の南に邪馬壹国があり、投馬国と接している」と読み、「水行十日、陸行一月」は⑧と同じく帯方郡からとなります。ここで陳寿は「女王之所都」を「水行十日、陸行一月」の前に入れて、読みのリズムを変え「帯方郡からだが⑧とは異なる」と注意喚起をしています。

つまり、⑨には「陸行」が入っており投馬国へ船で直接行くルートではなく、「水行十日、

陸行一月」は、帯方郡から狗邪韓国、対馬国などを経由して投馬国、邪馬壹国へ行く一連の道筋となって、その全移動方法と全移動日数となります。

陳寿は帯方郡から邪馬壹国まで投馬国を介した「水行二十日」と「水行十日、陸行一月」の二通りの道筋を示したわけです。

古田説の（ⅱ）はよく考えられていますが、「行」が隠れているのではなく、「陳寿が書かなかった」のであり、書式から投馬国と邪馬壹国が接していることを示しています。

従って、古田説は投馬国と邪馬壹国が誤った場所になっている、と書式から証明できたので、「古田説は完全には成立していない」と結論します。

以下に、「私の投稿文」の図１、図２と表１を示しておきます。私の解読は不弥国・投馬国・邪馬壹国が順に接し、「陳寿が作った里程書式」に沿ったものになっています。

・帯方郡から邪馬壹国へ至る道筋

不弥国を福岡城址付近とし、投馬国は福岡平野、邪馬壹国は両筑平野の筑後川と宝満川に囲まれた場所で、この３国は順に接しており「投馬国は邪馬壹国の北」となっています。

福岡平野は須玖岡本遺跡などがあり５万戸の投馬国にふさわしい場所、両筑平野には夜須遺跡群や小田・平塚川添遺跡などの弥生大集落があった場所で、筑後川と宝満川という自然の大環濠に囲まれたこの地は７万戸の大国、邪馬壹国といってよいと考えています。

また⑩の「その余の旁国＝女王国の北以外の国々」は図２のように筑後川流域の筑後平野と佐賀平野です。これを陳寿は⑩で「その余の旁国は遠絶にして、詳にすることを得べからず」と記しています。

地図で見るとさほど遠くとは言えませんが、筑後川と宝満川で隔絶され、また詳しく書くほどの国々ではないので邪馬壹国連合の構成国として、国名だけを一括して記したものと考えています。

また、⑪の距離「郡より女王国、萬二千余里」も表１のように整合しています。

尚、古田説は「短里」を用いており、「私の投稿文」でも「短里」が倭人伝里程の中で成立していることを確認しています。

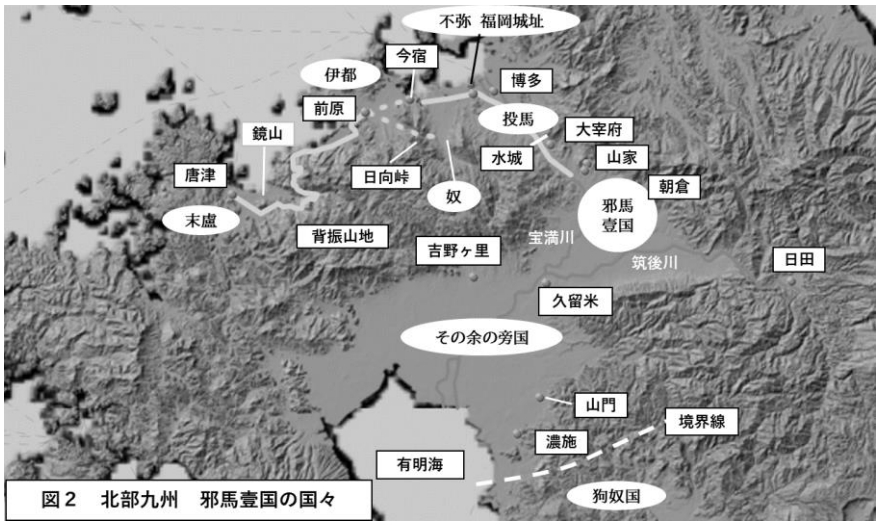


図２　北部九州　邪馬壹国の国々

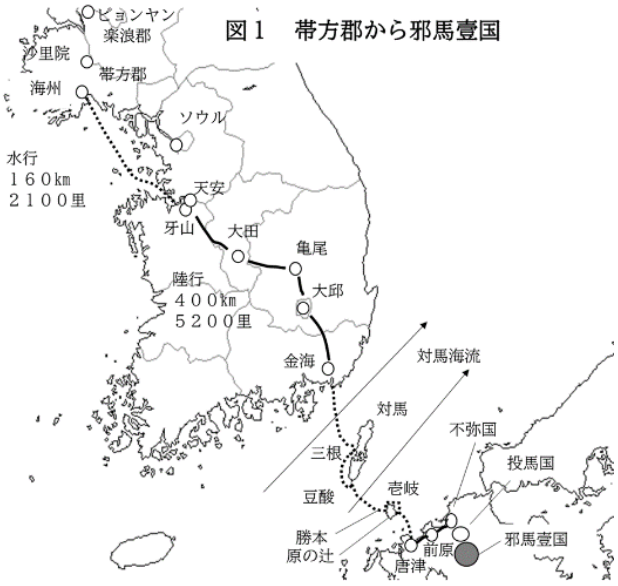
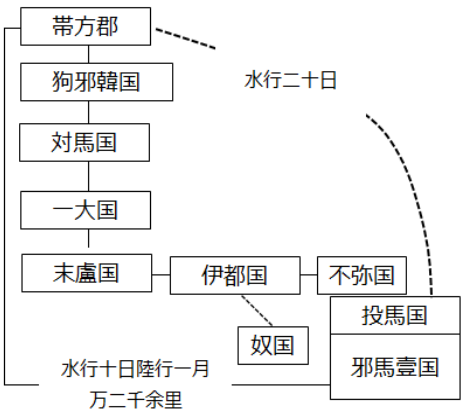


表1　邪馬壹国までの里数・日数の検証（短里＝77m／里）

	場所		移動距離		移動日数	
	出発	到着	km	短里換算	水行	陸行
帯方～狗邪韓国	海州	牙山	160	2100	2	
	牙山	金海	400	5200		22
狗邪韓国～対馬国	金海	三根	100	1300	2	
	三根	豆酸	64	850	1	
対馬～一大国	豆酸	勝本	65	850	1	
	勝本	原の辻	32	400	1	
一大国～末盧国	原の辻	唐津	50	650	1	
末盧国～伊都国	唐津	前原	40	500		3
伊都国～不弥国	前原	今宿	8	100		
	今宿	福岡城址	8	100		1
不弥国～投馬国	福岡城址	須玖	8	100		
投馬国～邪馬壹国	須玖	山家	12	150		1
		合計	947	12300	8	27
	倭人伝の里程			12000余	10	30



・道里とは…里数、旅程（日数）である

「水行二十日」は道理ではないという意見もありますが、倭人伝の手本と云われる『漢書』の西域伝を見ると「里数」や「旅程」は「道里」であることがわかります。西域伝には

「自宣、元後，單于稱藩臣，西域服從，其土地山川王侯戸數道里遠近翔實矣（宣帝より元帝以後、単于は藩臣と称して漢に仕え、西域諸国も服従し、その土地、山川、王侯、戸数、道里の遠近は詳細的確であった)」(訳本『漢書』小竹武夫訳　筑摩書房)。

と前置きがあり、次いで

「大月氏国、治監氏城，去長安萬一千六百里…東至都護治所四千七百四十里…西至安息四十九日行，南與罽賓接」。

などがあり、「里数」や「四十九日行」の旅程がともに書かれているので『漢書』は里数、旅程を道里としていることがわかり、陳寿は手本とした『漢書』の表現法を採用し、それに工夫を加えて独自の書式に仕上げたと考えています。

・帯方郡治は沙里院付近

古田氏は帯方郡治をソウルとしていますが、考古学者の東潮氏は概略「ソウルは帯方郡治に比定しえるほどの漢魏系遺物や遺構などは未確認、沙里院付近からは帯方太守張撫夷の墓などが出ているので帯方郡治は沙里院」と記されています（『邪馬台国の考古学』平成24年）。

私も当初はソウルと考えていましたが、そこからなぜ水行が必要？そのまま陸行したほうが合理的だろうなどと考え、今は帯方郡治を沙里院付近に変更しています（図１）。

・帯方郡の海州から対馬・壱岐・唐津は一直線でその直線距離は630km

海州・対馬・壱岐・唐津が地図上で一直線に結べます。韓伝の「方四千里」や倭人伝の「方四百里」などの「方〇里」による距離表現に着目すると、陳寿は帯方郡境の海州から唐津まで短里（77m／里）の直線距離で7700余里＝（韓）方4000＋400＋300＋海峡幅計3000里と示しています。「余里」を考慮すると実際の距離約630km（8200里）と驚くほど合っています。陳寿は海州から唐津までの距離を簡略に「方〇里」、さらに異なる海峡幅を「各千余里」にすることで「７７００余里」と示したと言え、これで邦光氏の疑問Ｂも解決です。

尚、ソウルからも一直線で結べますが、その距離は約530km（6900里）と短く、この点からもソウル説は支持できません。

・島めぐり読法

対馬国、一大国（壱岐）は「方可四百余里」「方可三百里」とあり、島を正方形とみなした「方〇里」の表現を古田氏は「島めぐり読法」と呼んでいます。

正方形の外周、上辺中央から下辺中央までの半周を、島の北から南へ移動する距離として示す方法です。移動距離は対馬800里、壱岐600里となりますが、表１からわかるように概ねよく合っていますし、この「方〇里」は先述の「７７００余里」を示すための概数なので、厳密に考える必要はありません。

陳寿は距離の概数「方〇里」も使って里程を作ったので、『漢書』の詳細な「道里」に対して⑩のように「略載」と記したと考えることもできます。

また、古田氏は島の移動を「陸行」としていますが、ここは島の外側を「水行」のほうが合理的で、私は「水行」としました。

・韓国内陸行はあり得るのか？…あり得る

諸説の多くは、里程①の帯方郡から狗邪韓国まで「全水行」としていますが、私も古田氏と同様に①の「歴韓国」の語句から韓国内を陸行した道筋にしています。

『三国志』蜀志法正伝に「歴」の用例、「所歴輒破（歴する所すなわち破り）」があります。これは劉備が劉璋から蜀を奪うときの話ですが、劉備軍が進軍経路の劉璋軍がいた場所を次々と撃破して通り、成都に迫っていく様子を表しています。つまり「歴韓国」は「韓国の中を通る」と解釈することも可能です。

また、下記①の「七千余里」の位置がそれを示している、と考えています。

①従（帯方）郡至倭、循海岸水行、歴韓国、乍南乍東、到其北岸狗邪韓国、七千余里
②始度一海、千余里至対馬国・・
この①と②は連続式の書式ですが、①は②と同じように「循海岸水行　七千余里」と書けば「全水行」と明快ですが、そうはなっていません。
また、「全水行」とすると「水行十日、陸行一月」の「陸行一月」を満たす合理的な道筋を見いだすことは困難だろうと思っています。
尚、韓国内陸行はネットの古代史サイトで、鉄道の「京釜線」を教えていただき、この線路を主にしています。鉄道が敷けたということは、古代の道もそのあたりにあっただろうと想定し、鉄橋やトンネルはなかったので里程は50kmほど鉄路より長く見積もっています。

・韓国内は治安が悪かったので通れない？…治安がよかった時もあった
倭人伝の里程は２４０年の魏使来倭時の道筋だけ、と考える必要はありませんが、韓国内の治安について２４０年頃はさほどの問題はなかった、と思われます。
なぜなら、魏志韓伝に「景初年間（237～239)、明帝は帯方、楽浪の両太守を任命し秘密裏に海から各々の郡に入って郡を平定させた。韓諸国の臣智たちに邑君の印綬を授け、それに次ぐ実力者たちには邑長の位を授けた」とあります。
これは238年の公孫氏討伐に関するものですが、この頃の韓諸国の有力者は魏に恭順しており、魏使たちは魏軍に守られて通行すれば安全だったでしょう。
韓の治安が乱れたのは正始6年（245年)、濊が高句麗の支配下になったときではないか、と思います。またその後、辰韓の8国が楽浪郡編入に対して反乱を起こし、帯方太守の弓尊が戦死し、247年に帯方太守王頎が着任した記事もあります（魏志韓伝、倭人伝)。

・里程は魏志が下賜品を運んだ240年だけの道筋か？
多くの論者が倭人伝の里程は240年に来倭した魏使の道筋だけ、と考えているようです。私も当初はそうだったのですが、今はそのようにとらえる必要はないと考えています。邪馬壹国と魏との交流は238年から247年まで10年に及び、その間に魏使はいろいろな道筋を通って訪倭したでしょう。陳寿はそれら多くの道筋の中から陳寿が意図した記述に合う道筋だけを選んで「方○里」も使って倭人伝の里程に仕上げたものと考えています。
・戸と家の違い…よくわからない
古田氏もこれをかなり深く研究されたようです。「家」はいろいろな国や種類の人たちが集まった共同集落に用いたのではないか、とされていますが、明快な結論は得られなかったようで、私もわかりません。戸数については、後述します。

2.邪馬台国北九州説の崩壊…崩壊しない
大平裕氏の第14号、16号での投稿文です。ここまでの説明で邪馬壹国は九州の両筑平野にあったことは明らかにしていますので、「邪馬台国北九州説」は崩壊しないと考えています。
また、「邪馬臺（台）国」ではなく「邪馬壹国」が倭人伝の正しい国名であることを「私

の投稿文」で説明しています。

さて、その投稿文に「夷守」「人口問題」「庄内式土器」がありました。

・夷守は卑奴母離？…「火守」もあるのでは？

大平氏は倭人伝に記載がない国名「邪馬臺」を「ヤマト」として、書紀記載の「夷守（ひなもり）」を倭人伝の「卑奴母離」にあてておられます。

「卑奴母離」は倭人の発音を中国人が聞いた中国製倭語だと思っていますが、小泉保氏によると弥生人はズーズー弁に近い縄文語を引き継いでいた、とのことです（『縄文語の発見』）。

素人の想像ですが、倭人の発音は今よりも聞き取りづらい発音だったと考えられ、当時の倭人の「なにぬねの」のほとんどを中国人は「奴」で聞いたと考えています。

元伊都国歴史博物館館長だった榊原英夫氏も「奴」を「の」と読み⑥の奴国を早良平野、「卑奴母離」を「火守」の可能性もあるとし、狼煙との関連も示唆されています（『邪馬台国への径』2015）。

私も「火守」と読み、例えば対馬から壱岐へ伝令が行く場合など狼煙で知らせ、伝令が昼間に到着しない場合など夜間に「目印の火」を燃やしたのではないか、と考えています。

従って、ヤマト政権と結び付けて国防のために奈良から遠く辺鄙な地に派遣された「夷守」と解釈しなくてもよい、と考えています。

・2つの奴国

図２に示しましたが、奴国は「の国」で⑥の奴国は早良平野、また⑩で「女王の境界の尽きるところ」と記された第２の「奴国」は図２の狗奴国との国境に近い濃施（旧名野志）あたりにあったと考えています。

考古学者の片岡宏二氏によると「このあたりには『吉野西遺跡』『七つ家遺跡』などがあり、熊本県の特徴的、免田式土器などが出土し、邪馬台国＝筑紫平野と狗奴国の両勢力がせめぎ合っていた地域に違いない」とのこと（『増補版　邪馬台国論争の新視点』2019）。

従って、第２の奴国の南となる熊本県を狗奴國と私は考えています。

また、昔、「三根の郷」と呼ばれた地域、吉野ヶ里は「弥奴国」、山門は「邪馬国」などと「その余の旁国」を筑後川流域の筑後平野や佐賀平野に当てはめることができる、と私は考えています。山門は北部九州全体から見ると「卑弥呼の都」とするにはバランスがいいとは言えず、「旁国」が「女王国の北」となって倭人伝の記述とあいません。

・七万戸…誇張だろう

倭人伝記載の戸（家）数の合計は14万９千戸となり、5人／戸とすると人口は75万人ほどにもなり、当時の日本全国の推定人口を上回る数字になるようです。

この一点をもって「倭人伝は信用ならん。邪馬臺国をヤマトとして考えるべきだ」という意見もありますが、日本全国の人口を上回る数字であれば奈良であろうが、近畿一円であろうがこれも成立しません。

・中国には人口百万の都市を「百万戸」と書いた詩がある

謝銘仁氏が『邪馬台国　中国人はこう読む』に記しています。どの時代の詩かわかりませんが、魏使や陳寿もこのように書いたとすれば「戸＝人口」と考えることができ、邪馬壹国連合は15～20万人ほどで、現実味がでてきます。

・破賊文書，舊以一為十（人数を10倍にする）

魏志国淵伝に「賊軍を撃破した場合の公式（破賊）文書では、一を十と（10倍に）計算するのが習慣だった」(『正史三国志』筑摩書房）とあります。

このように見れば、実人口は1／10となって7万５千人、「その余の旁国」を入れても10万人程度となります。

この「破賊文書」は陳寿が読者に与えたヒントかもしれません。ということで倭人伝の戸数や人口は誇張されている、と現状では見るのがよいと考えます。今後、発掘が進めば新たなことがわかってくるでしょう。

・一大率と「家」

「一大率」の役割は魏と公孫氏が戦っていた最中の238年6月に、卑弥呼が他の国々に先駆けていち早く魏に朝貢して得た、大陸交易の独占権を守ることにあったと見ています。

つまり朝鮮半島に向かう海の監視、制海権を守ることであり、出雲その他の国々が独自に半島に渡ることを阻止する役目で、「卑奴母離＝火守？」もその一つだったでしょう。

倭人伝は「一大率を女王国の北に置いた」とあり、近畿から見た「北」は北陸方面であり、九州に一大率を置いた、という説は方向的に無理筋だと思います。

さて、古田氏は「一大率」を「一大（壱岐）国」の海洋軍団と見ていますが、私も賛成です。出雲などの日本海側の国々から制海権を守るには、博多湾周辺も重要な位置になります。

そこで、一大国と同じ「家」が使われている不弥国には、一大率の軍団が駐留していたと考え、不弥国を博多湾が見渡せる福岡城址付近にしました。

そのようなわけで、「家」は「武家」や「兵家」といった意味合いがあるのではないか、と考えています。

また、福岡城址の西にある西新町遺跡も不弥国として有力ですが、ここは２万戸の奴国を財政的に支える港町だった、と考えています。

・庄内式土器

大平氏によると福岡県の三雲南小路や西新町遺跡群などから大和・河内製の庄内式土器が大量に出土しており、一大率の役人たちが畿内からここで駐在生活をしていたに違いないとのことです。先述のように一大率が近畿の組織とは考えられません。土器については別の視点が必要ではないでしょうか。

米田敏幸氏によると、同じ形式の庄内甕といっても胎土観察から産地は吉備、播磨、河内、大和といろいろあり、大和産の西への移動は岡山まで、九州には播磨産だそうです。

また、「大和の纏向遺跡だけに日本各地の土器が集まっているのではなく、日本各地の交流拠点で同様の現象が見られることを明らかにしておきたい」とのことです。(『邪馬壹国の

歴史学』2016)。

これは、倭人伝時代に併行する庄内甕期において、纏向遺跡が唯一の中心地域ではなく、各地に商業、文化の交流地域があったことを示しています。

逆に、九州産の土器が纏向にほとんどない、ということは先進地域の北部九州の商人たちが後進地の纏向などへ重たい土器を担いで出向くことはなかった、と見ることもできます。

纏向は大陸貿易を邪馬壹国に独占されたために、東側の国々が連合して在地の大和勢力もしくは他の勢力を中心に再編成された国だ、と考えています。

土器については、その年代などはっきりしていない部分もあるので、年代の絞り込みや北部九州の出土土器の産地分類と数量などのデータが出てくることを待ちたいと思います（私が知らないだけかもしれません)。

まとめ

今回、古田説を崩す、という観点から里程問題に取り組みましたが「陳寿の里程書式」の発見につながり、倭人伝里程の真髄に迫った思いです。

その結果、古田説は里程⑧の解釈を誤り、最終の邪馬壹国も違った場所になったことを明らかにすることができました。

陳寿は実に巧みな里程書式を構築し、帯方郡から順に国々を辿る道筋と軍事的に見た注意すべき道筋（私の投稿文参照）を記述し、そのために数多い道筋の中から陳寿の目的に合致した道筋だけを選んでいます。従って、地図を見れば陳寿が採用しなかった他の道筋も見えてくるのですが、里程記事の中には数多くの制約条件が入っているので、他の道筋が制約条件をクリアできるか否かの検証も必要となります。

さて、従来、里程の①から⑨まですべて連続式、また伊都国を介した放射式、などの解釈がありました。今の私から見れば、これらは「短里の存在」が認識されていなかった時代のもので仕方がなかった面もありますが、「もはや時代遅れ」といった感があります。

古田氏は『三国志』の用例などから里程書式を見直し、これらが適切ではないことを明らかにして新解釈を提唱されました。ただ、画期的であった古田説にも問題が残っており、その問題点を検討することで今回の発見につながったと思っています。

邪馬壹国は筑後川と宝満川に囲まれた地域にあったことは、概ね正解だろうと思っていますが、今後の発掘などでさらに明確になってくることを願っています。

今回、古田氏には失礼なことであったと思いますが、私は古田本から『三国志』ほか中国史書などの豊富な用例、『三国志』や倭人伝とはこういうものだ、従来の通説には疑問点が多い、ことなど多くのことを学ぶことができ、古田氏に敬意をはらっています。

以上